

ふるさとファイル

展示コーナーだより
第 61 号
平成 27 年 1 月
生涯学習課文化財係

元水戸藩士、 小笠原諸島へ渡る

現物の展示期間（図書館休館日は除く）
資料③④⑤⑥
平成 27 年 1 月 6 日（火）～2 月 15 日（日）
資料①②⑦
平成 27 年 2 月 17 日（火）～3 月 31 日（火）

原田明善は、幕末の名君として知られる水戸藩主の徳川斉昭に仕え、明治維新後は大蔵省の役人に転身します。明治 8 年(1875)に、小笠原諸島を日本の領土として位置づけるため、大蔵省ほか 3 省は合同で調査団を派遣しますが、そのなかにも明善の姿がありました。最近市内で発見された原田家の古文書から、近代国家の成立に奔走した志士の活躍ぶりを紹介します。



1 徳川斉昭と原田家

←徳川斉昭像（内藤業昌画）

↓① 徳川斉昭書状 安政3年（1856）

徳川斉昭が、病後の原田成祐（兵介）を見舞った手紙です。成祐は明善の父で、斉昭の奥右筆頭取に抜擢され、側近として活躍しました。古物に高い関心を持っていた斉昭は、熊本の本妙寺が所蔵する宗尊親王（鎌倉時代の能書家）筆の「日本紀 竟 宴和歌」の現状について、熊本藩家老の長岡監物に尋ねるよう成祐に指示しています。また、真否は定かではありませんが、久能山東照宮に納められる徳川家康の愛刀「三池典太」も紛失し、今現在はずりかえられているという話を引き合いに出して、古物の散逸を憂えています。なお、「日本紀 竟 宴和歌」と「三池典太」は、現在いずれも国指定重要文化財となっています。



↑② 徳川斉昭封緘印

封緘印とは、手紙が未開封であることを示すもので、現在でも「緘」という印を封筒の口に捺することがあります。「潜龍閣」という斉昭の号が印刻されているので、斉昭の書状の包紙に捺されていたものです。斉昭は、密書を送る際に、相手が見たことを確認するために、封緘印を切り取って返却するよう要求していました。原田成祐や明善がいずれも斉昭の近くに仕える奥右筆で、書状の送付や収受を担当していたことから、これらが原田家に残されたと考えられます。



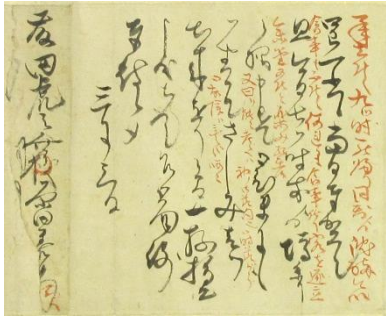


2 藤田東湖と原田家

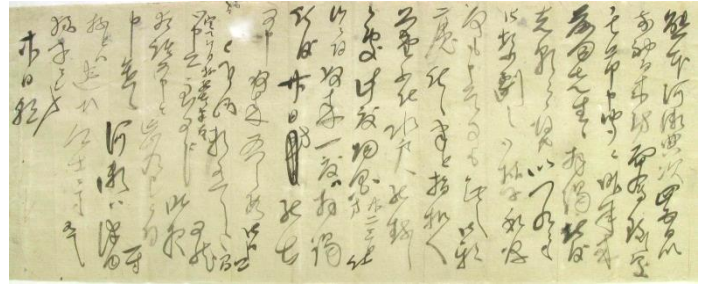
←原田成祐像（内藤業昌画）

③ 原田成祐・藤田東湖往復書状

原田家は、斉昭の腹心で全国の尊皇志士に多大な影響を与えた思想家の藤田東湖と密接な交流を持っていました。この手紙は、成祐が東湖



を食事に誘ったときのものです。東湖は、直接それに朱筆で返事をしたためていることから、二人が親しい間柄にあったことがわかります。



④ 原田成徳書状 安政元年（1854）

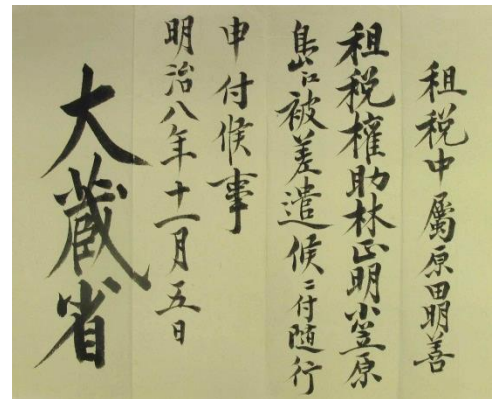
成祐の長男である成徳（1860年没）から、弟の明善へ送られた手紙です。東湖への面会を求めて、河瀬典次が成徳のもとに来たことを報告しています。典次は、熊本藩の思想家で東湖とも交遊のあった横井小楠の弟子で、嘉永6年（1853）から翌年にかけて、同門の津田山三郎とともに諸国を巡りました。典次が「昨年来藤田先生へ拝謁」したいと希望していることから、この書状は安政元年のものと判明します。明善が東湖の門人で、かつ成徳の妻が東湖の娘ということもあって、原田兄弟が東湖の窓口となっていたことを示す手紙です。



3 明治維新後の原田家

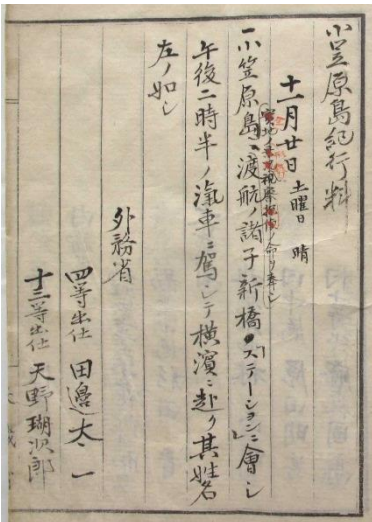
⑤ 小笠原渡島辞令 明治8年（1875）→

明治維新直前の明善は、水戸藩内の政治抗争に敗れ入獄していました。維新後は、茨城県につとめたのち、内務省を経て、大蔵省に入省します。折しも明治8年、小笠原諸島を日本の領土として位置づけるため、外務省・大蔵省・海軍省・内務省の4省は、合同で調査団を派遣します。明善はその一員に抜擢されました。



⑥ 小笠原島紀行料 明治9年（1876）

小笠原諸島はもともと無人島でしたが、当時すでに欧米系や南島系の入植者が居住していました。彼らの処遇や現地拠点の設置などについて計画を立てることが、調査の主目的でした。この日記は、帰京後の明善が大蔵省へ報告するため、手記を整理し直して清書したものです。調査のなかで見聞きした島民の暮らしぶりなどが、克明に記されています。



⑦ 手帳 明治8年（1875）→

明善が小笠原諸島に持参した手帳。同行した人物の名前と住所が記されており、帰京後の連絡のため、住所交換をしたことがわかります。

